

言語文化教育研究学会 第2回年次大会

「多文化共生」と向き合う

シンポジウム2：教育に何ができるのか

宇都宮 裕章（静岡大学）

南浦 涼介（山口大学）

山西 優二（早稲田大学）

ヤン ジョンヨン（群馬県立女子大学）

司会：佐藤 慎司（プリンストン大学）

今回のテーマ：「多文化共生」と向き合う

- ヘイトスピーチ，政治家の差別的暴言・失言が許されてしまう社会
- つながりを広げるはずの外国語言語教育が，学習言語のみの使用を常に強要した場合，何らかの理由でその言語が話せない人たちを逆に排除してしまっている
 - ことばとは？（マルチモダリティ（視線，ゼスチャー，色使いなど）は？アート，音楽は？）

さまざまな現状をクリティカルに見ることの大切さ

- クリティカルに/な研究・実践をする人の中での，クリティカルに見られない人（見るのが苦手な人）に対する上から目線
 - 愛情のないクリティカル
- これからの自分，自分の大切にするコミュニティ・社会をよりよいものにしていきたいという思いをベースにしたクリティカル
 - 愛情のあるクリティカル

日本語教育学研究 6

未来を創ることばの教育をめざして
内容重視の批判的言語教育
(Critical Content-Based Instruction)の理論と実践

佐藤慎司・高見智子・神吉宇一・熊谷由理【編】

*Language education for
social future*

Critical content-based instruction

*Shinji Sato, Tomoko Takami,
Uichi Kamiyoshi, Yuri Kumagai*

ココ出版

『未来をつくることばの教育を
めざして：内容重視の批判的言
語教育(Critical Content Based
Instruction: CCBI)』(2015)ココ
出版

Language Education for Social
Future

シンポジウム 2 で考えよう

テーマ「多文化共生とむきあう：教育に何ができるのか」

社会・コミュニティの一員として自分に何ができるのか

- どんな教育実践者・研究者になりたいのか
- 自分は、どんな（教育）実践・研究を通して、どういうコミュニティ・社会づくりをめざしていきたいのか
- そのためには、自分は何をすればいいのか
- 今実際にしているか

多文化共生：総務省の定義

- 国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の一員として、その個性と能力を発揮し、共に生きること
- 「多文化共生」という言葉を聞いてみなが同じような定義を思い浮かべるわけではない
 - 各シンポジストの多文化共生観は？（さまざまな立ち位置の確認）

教育とは？

- 能力を引き出すことである
 - よりよく生きることを促進するためのものである
 - 強制の一種である
 - 社会の再生産である など
-
- 学校教育， 地域教育， 家庭教育， 社会教育， 生涯教育など

「多文化共生」と（ことばの）教育

多文化系学会連携協議会シンポジウム（2011年以降毎年）

- 異文化間教育学会，コミュニティ心理学会，日本学校教育学会，日本語教育学会

異文化間教育学会

- 異文化間教育学会特定課題研究（「多文化共生は可能か？—移民社会と異文化間教育—」（2009），「多文化共生社会をめざして—異文化間教育の使命」（2008））

日本語教育学会

- 多文化共生社会における日本語教育研究会（2006年発足，計12回の研究会）
- 『日本語教育』（2008）138号特集「多文化共生社会と日本語教育」など

「多文化共生」と（ことばの）教育

これまでの議論

1. 「多文化共生」概念の批判的捉え直し
2. 多文化共生に向けての教育課題
3. 多文化共生に向けての教育実践

1. 「多文化共生」概念の批判的捉え直し

多文化共生という用語

• 上から押し付けられるような「行政的・官製的概念」と、地域社会でともに生きるための実態をつくっていく努力の中での「実践的概念」の両方のニュアンスが含まれている(金 2010)

• 以下のような視点からだけの多文化共生でよいのかという疑問 (馬淵 2010, 安田2013)

- マジョリティが教えマイノリティが習う, 「外国人」当事者の視点という発想 → 日本人と外国人の境界線
- 外国人支援という視点 → 「困っている」「かわいそう」
- 地域社会における共通言語としての日本語, 「やさしい日本語」(庵, イ, 森2013) が必要だという発想 → 理念なのか, 実体なのか

1. 「多文化共生」概念の批判的捉え直し

- 「外国人」は社会に同化されるべき存在なのか
- 社会を作るのはいったいだれなのか
- 社会とはだれにとっての・だれのための・だれによる社会なのか

→第7回多文化共生社会における日本語教育研究会では「定住外国人とともに創造する新たな日本社会と日本語教育」という方向性が打ち出されている

2. 多文化共生に向けての教育課題

- 政策への提言という視点
 - 諸外国との比較において、日本ではとくに特に欠けている
→地域日本語教育と日本語教育保障法(案)の連携あるいは連関などについても話し合いが持たれている
- 外国にルーツを持つ子供の発達保障, 教育環境に関して
→2014年度から小・中学校において「特別の教育課程」として日本語指導を実施することが認められた
- 多文化共生社会を担う人づくり, 居場所作り

3. 多文化共生に向けての教育実践

西口(2008)：「おしゃべり日本語」

- 地域日本語教室で必要なのは，生活上必要なための「生活日本語」を教えるのではなく，まわりの人と交流し親交を深めていくための「おしゃべり日本語」の能力を伸ばしていくことである

岡崎(2008)：共生日本語教育

- 日本語ボランティアが，外国人とともに外国人と自らのおかれた現実を共有し，その現実の变革をともに目指す活動

南浦：社会科教育の実践

山西ら：国際理解教育，「多言語・多文化教材研究」などの実践

まとめ：今後の課題

多文化共生に関する議論がある程度出尽くし、お互いにネットワークを作って情報交換していくというレベルから、

1. 一個人としての教育実践だけではなく、機関などの大きなレベルや、地方自治体・国の政策への提言
2. 国や社会だけでなく、さまざまな個人の意識に働きかけ現状を変えていく

という段階にきている。その中で

3. メディアとどうかかわっていくか？

- 新聞，テレビなど
- ソーシャルメディア：Facebook, Twitter, Youtubeなど

まとめ：今後の課題

4. 積み重なっている多文化共生を推進する理念，施策，掛け声，事例をどう有効活用していくか
5. 現状では，都道府県や市町村レベルでは多くの自治体が「多文化共生推進プラン」を掲げているが，このような取り組みにことばの教育がどう関わっていくか

シンポジスト

1. ヤン ジョンヨン (群馬県立女子大学)
 - 地域日本語教育
2. 南浦 涼介 (山口大学)
 - 学校教育 (社会科教育)
3. 宇都宮 裕章 (静岡大学)
 - 教育言語学
4. 山西 優二 (早稲田大学)
 - 国際理解教育, 開発教育

シンポジストの発表

それぞれのシンポジストが考える

1. 「多文化共生」観は？（総務省の定義との比較？）
2. その「多文化共生」の実現に当たって、何を考え、
どんな教育実践を行ってきたか

をそれぞれの専門分野からお話しいただく

[多文化共生に対するさまざまな立ち位置の可能性と、
パネル全体の方向性を確認]

まとめ：今後の課題

1. 国の政策への提言
2. 個人の意識にどう働きかけるか
3. メディアとどうかかわるか
4. 積み重なっている多文化共生を推進する理念，施策，
掛け声，事例の有効活用
5. 地方自治体のプランにことばの教育がどう関わるか

パネリスト ディスカッション

「多文化共生」を切り口にしたシンポジストの実践で

- 起こった問題点
- その解決策
- まだ解決されていない問題など

について深く

考えていく

→あなたはどのような社会（文化）づくりをめざしたいのか？

グループ ディスカッション

1. 「多文化共生」実現のために何か**取り組み**を行っていますか（教育実践，政策，研究など）
 - 行っている場合→どんなことがうまくいっていて，どんなことがうまくいっていませんか？どうすればもっとうまくいくと思いますか？
 - 行っていない場合→どんなことをしてみたいですか
2. あなたにとって**多文化共生**とは何ですか？なぜあなたにとって**多文化共生**が大切なのですか？

[ネットワークづくりと自己反省の場の提供]

→ディスカッションの一部（問題点など）を会場とのシェア

→解決策を会場と一緒に考える